

文部省 科学研究費助成研究

◆古筆判別法の開発による古代官営工房組織の研究

代表者 金子裕之 特定研究A 新規百万塔工房の復元には、墨書の人名を判別する必要がある。本研究は作業をコンピュータ化すべく、文字判別の新ソフトを開発し、研究者の判定結果と比較。人間が行う総合・平準化の作業をソフトに取り入れることが課題である。

◆数値地理情報を用いた古墳の立地に関する研究 一大和盆地を中心として

代表者 金田明大 特定研究A 繼続大和盆地内の前方後円墳を対象に各古墳のデータベースを作成し、古墳分布図、地形図等の空間情報との連携を試みた。これをもとに、条件別の分布図の作成や地形条件からみた古墳の分布の傾向についての検討を行い、考古学研究へのGIS利用の有効性を確認した。

◆北東アジアの発掘住居址に関する民族考古学的研究

代表者 浅川滋男 特定研究A 繼続北東アジア諸地域における竪穴住居址の遺構データを集成する一方で、日本の縄文・弥生時代の焼失竪穴住居址からその上部構造を復原検討している。とりわけ、岩手県一戸町の御所野遺跡でみつかった焼失住居群（縄文時代中期末）から復原される上部構造は、カマクラ形・側道出入りの土屋根構造であり、ナーナイ族やイヌイット族の竪穴住居と似ている。

◆古文書料紙原本の基礎的データ測定記録装置の研究製作

代表者 綾村 宏 基盤研究A 新規古文書学の形態論的研究の要件である文書が書かれている料紙の法量、厚さ、重さ、料紙・墨色の色調などの基礎的データを単一で測定記録する一体型機器を、3カ年で研究製作するものである。

◆地中レーダー探査の手法を用いた広域遺跡調査法の開発研究

代表者 西村 康 基盤研究B 繼続地中レーダー探査の方法を応用して、広

範囲にわたる集落・官衙遺跡を対象に、1)遺跡内容を明らかにして発掘調査に必要な地下情報を提供すること、2)遺跡の構造と性格を推定すること、3)その範囲を限定して遺跡の保存に資することが主たる目的である。

今年度まで地中レーダー探査でも深い層位が探れるよう測定方法とデータ処理法を開発することに集中、実現できた。

◆土壤に含まれる有機遺物の採集・分布法の開発—低湿地遺跡出土の動植物遺体

代表者 松井 章 基盤研究B 繼続奈良女子大学的場輝佳・荻野麻理両氏の協力を得て住居跡、甕棺、古墳、溝などの土壤に含まれる無機物質の組成、量を調べ、人間活動の痕跡を明らかにできる見通しを得た。遺構土壤の微細遺物の採集法と、その画像処理法について、技術的改良を行った。

◆箱根芦ノ湖の湖底木と巨大地震に関する年輪年代学的研究

代表者 光谷拓実 基盤研究B 繼続本年度は、昨年度の補足的な調査で、採取したサンプルはスギが3本、ヒノキが2本であった。年代測定の結果は昨年と同様西暦500年前後、西暦1000年前後を示すグループに分れた。

◆歴史的建造物保存修復技術の考え方と方法—地域文化財修復指針案の作成

代表者 木村 勉 基盤研究C 繼続近代建築を対象とした地域文化財の建造物保存修復技術の基本的な考え方と方法について、各地の状況を実地調査し、地域文化財にふさわしい保存修復のあり方を、事業面と、保存修復技術面からそれぞれ具体的に検討した。そして『地方文化財保存修復技術の考え方と方法』として指針案を作成した。

◆中・近世期における金工材料と製作技法の歴史的変遷に関する研究

代表者 村上 隆 基盤研究C 繼続中・近世期の遺跡から出土する金属製造物の材質と製作技術を解明するとともにその変遷を追うことにより、わが国の古代から近代にいたる金属工芸史ならびに金属加工技術史を概観することを目的とした。このうち特に近世期に関して成果があがった。

◆古代都城廃絶後の変遷過程

代表者 谷野和己 基盤研究C 繼続平城京の復原図である北浦定政「平城宮大内裏跡坪割之図」について、北浦家に伝わる草稿本と小原文庫の浄書本などを比較検討した。その結果、内容に部分的改変を加えた「坪割之図」の浄書本が、定政によって時間を置いて複数作成された可能性が判明した。

◆古代武器・武具の研究—実用性の復原的考察を中心として

代表者 小林謙一 基盤研究C 繼続復原した古墳出土の弓矢を試射した結果、飛距離、貫通力とも、十分実用性があると考えられるにいたった。特に、重量のある鉄鎌は、木製防禦具を破壊する威力を有する。しかし、鉄製防禦具には効果がなく、その普及とともに、先端が細く尖った鉄鎌が出現する。

◆集落・墓地・祭祀・土器から見た弥生時代から古墳時代への移行過程の研究

代表者 岩永省三 基盤研究C 繼続2年目の本年度は、墳丘墓の被葬者構成・墳墓祭祀の変化と、共同体祭祀としての青銅器祭祀の変質・消滅との連関性を明らかにした。

◆記号・文字・印を刻した須恵器の集成

代表者 翼淳一郎 基盤研究C 繼続藤原京・平城京出土資料から7世紀～8世紀初めに出現する特徴的な銘文資料を分析し、須恵器の調査制の関わりを検討した。

◆南都七大寺所蔵青銅製容器の形態と製作技術に関する編年研究

代表者 毛利光俊彦 基盤研究C 繼続特に1998年7月に、専門家による法隆寺青銅製容器の形態と製作技法・材質に関する研究会を開催し、ここでの討議を踏まえて青銅製容器編年を確立した。現在、報告書を作成中である。

◆古代豪族居宅遺跡の研究

代表者 山中敏史 基盤研究C 繼続約400の古代豪族居宅関係遺跡の資料収集と分析を行い、豪族居宅の構成要素と建物の棟数の実態を把握し、敷地面積に階層性が伺えること、建物造営技術の点では集落と類似している場合が多いこと、などを明らかにした。

◆光学的解析法による古代ガラスの加工法等に関する研究

代表者 肥塚隆保 基盤研究C 繼続
従来からのX線透過法に加えて新しく、X線CTを導入し、遺物の三次元的な解析を加えて調査を進めた。その結果、弥生時代に見られる鉛バリウムガラスは特殊なものを除けば、溶融法によって加工されているが、弥生時代から古墳時代にかけて流通したカリガラスなどでは、乾式法によって加工されていることが明らかになった。特にカリガラスの管玉は穿孔されており、鉛バリウムガラスの加工法とは異なっている。古墳時代のものとしては、藤ノ木古墳出土の青色透明な聚玉が穿孔されていた。

◆出土資料からみた国府の研究—但馬国府を例として—

代表者 寺崎保広 基盤研究C 新規
近年、木簡の出土例が増加している兵庫県北部の但馬国府関連遺跡をとりあげた。但馬国府の所在地と移転といった長年の研究に、木簡資料を材料として迫ろうとする試みである。

◆中世後半から近世における瓦生産の研究

代表者 山崎信二 基盤研究C 新規
九州の中世瓦の年代の細分を行い、1333年以降本州とは異なる九州の独自性を発見。その独自性は、丸瓦吊り紐と軒平瓦。額部後面のタテケズリにあらわれる。沖縄の瓦は1333年から1400年までのもの。近畿の中世末の軒平瓦は、同範のもので瓦当はりつけと額はりつけが混在し、これは奈良・京都の瓦工の周辺地域への逃散と関係する。

◆鎧帶の規格性から見た律令位階推定法の確立

代表者 松村恵司 基盤研究C 新規
本研究は、鎧帶の位階表示機能の構造を明らかにし、出土銅鎧から位階を推定する方法の確立を目的とする。本年度は都城出土銅鎧の型式分類作業を行い、文官と武官に対応する二系列の鎧帶のうち、文官系列の表金具にみられる規格差が、初位から六位までの正従8ランクの位階差に対応することを把握できた。

◆馬具副葬古墳の階層性と地理的分布に関する研究

代表者 花谷 浩 基盤研究C 新規

古墳群での馬具副葬古墳のあり方を、副葬馬具の型式変化という時系列的な側面と、古墳群内での共時的な側面の二方面に注目し、須恵器のTK23型式以前、TK47～TK10型式、MT85型式以後、の大きく三段階に分けて分析した。その結果、初期段階では、首長墳と群集墳の間に大きな格差があるが、後者の階層がその後、古墳規模においても副葬馬具の型式においても細分化していく傾向がみられた。

◆伝統的木造建築の振動特性に関する研究

代表者 内田昭人 基盤研究C 新規
當時微動測定により、伝統的木造建築の固有周期、振動モード、減衰定数などの振動特性を把握し、測定値と計算値との照合を行う。清水寺仁王門と南禅寺三門を対象として當時微動測定を実施した。

◆竪穴住居の空間分節に関する復原研究

代表者 浅川滋男 基盤研究C 新規
竪穴住居およびテント住居の空間分節を類型化したグスタフ・レンクの業績を再検討すべく、北東アジアのツングースと「古アジア語族」、さらに北米先住民の住居関係資料を集成した。これら民族誌資料から導きだされる空間分節の原理が、縄文時代の竪穴住居の床面遺物の分布などと対応可能かどうか、今後詳細に検討していく予定である。

◆日本庭園・庭園史関連用語の英語訳に関する研究

代表者 小野健吉 基盤研究C 新規
日本庭園の理解に不可欠な約450語の日本庭園関連用語を選定し、日本庭園に関する英文文献からそれらの英語訳を抽出、データベース化を行った。特に英文による最初の本格的日本庭園解説書である“Landscape Gardening in Japan”(by Josiah Conder; 1898)については、あわせて用語の英文説明も抽出し、データベース化した。

◆ムラの場、ハカの場—GISを利用した古墳時代集落・古墳の立地選択の研究

代表者 金田明大 奨励研究A 繼続
昨年度行った遺跡分布調査、測量調査についての成果をもとに、遺跡分布図の作製、古墳の鳥瞰図表示、古墳からの眺望の検討を行い、研究者の研究補助手段としてのGISの利用についていくつかの見通

しをたてることができた。

◆古代日本における都城と地方の漆紙文書の比較研究

代表者 古尾谷知浩 奨励研究A 新規
これまで学界で注目されてこなかった都城出土の漆紙文書について、地方出土の資料との比較を踏まえつつ、内容、形態上の特質を明らかにすることを目的とし、本年度は平城宮・京出土資料の再調査を行った。成果の一部は本年報に掲載した。

◆古墳時代土師器の移動に関する研究

代表者 次山 淳 奨励研究A 新規
古墳時代前期には、各地の土器が分布範囲を超えて大きく移動する。1998年度は、畿内の土器の他地域への移動、畿内への他地域からの移動、の2項目を中心検討した。

◆古代寺院建築再考

代表者 箱崎和久 奨励研究A 新規
発掘調査がなされた大官大寺・平城薬師寺・大安寺の講堂は、三手先斗を用いていた可能性が大きい。創建形態を踏襲して現存する東寺講堂も三手先であり、講堂に三手先を用いるのは、古代中央官寺特有の形態だろう。

◆建築仕様書からみた明治初期木造建築の継手・仕口の技術に関する研究

代表者 長尾 充 奨励研究A 新規
近世末に日本に導入された洋風建築は、洋風小屋組という新たな構造形式や、ボルト・ナット等の構造補強材料をもたらした。これら洋風構造技術が伝統的な継手・仕口の技術に及ぼした影響と、建築設計における和洋の技術の使い分けを明らかにすることを目的に、明治初期の官庁関連の建築仕様書を検討し、さらに、現存建物の観察調査を行った。

◆前近代の日本における並木の文化史・制度史に関する緑地学的研究

代表者 平澤 毅 奨励研究A 新規
本研究の目的は、前近代の日本における並木の文化・制度の成立と変遷を明らかにし、その発展と伝播の過程を緑地学的に考察することである。本年度は、「前近代に起源を持つ日本の並木に関する歴史地理学的データベース」の基礎資料収集・データ入力、および並木に関する既往研究文献調査などを行った。